

鬱の手記

北川 聖

テレビではやぶさ2の快拳を興奮気味にアナウンサーが話している。私は若い彼らを何の感情もなく見ていた。太陽系の起源？ 地球生命の起源？ それがどうしたというのだろう。何の関心も起きない自分を不思議に見ていた。同時に快拳に沸き立つ彼らを見ながら心が沈んでいった。

あなたたちはあと数年で死ぬんだよ。分かっているのかい。科学者だから知っているだろう。でも科学者だから取り立てて話すようなことじゃないと思っっているんだろう。あなたたち夢中になっている自分たちを冷静に鏡で見たことありますか。もちろん、いろいろな人がいるだろう。年齢も千差万別だし。でもみんな身体中から喜びを発している。私は羨ましいと同時に滑稽さも感じた。あなたたちは未来に夢を託しているかもしれないがそこにあなたたちはいないんだよ。もちろん自分が科学の発展に少しでも貢献できるのが嬉しい人もいるだろう。捨て石でいいと思っっている人もいるだろう。でも生命の起源とかもつと大きく宇宙の起源とか知ってどうするの。人間はこの宇宙から外に出ることができない以上、神の目でこの宇宙を見ることはできない。人間はいつまで経っても人間を超えられない。一万年後もいるとして姿形は変わるかもしれないけど人間は創造主にはなれない。創造されたものであるという運命から抜け出すことはできない。私はたまたまテレビではやぶさ2の快拳を見ていた通りすがりのものにすぎない。そしてこれはブログに書かれた手記に過ぎない。一応「鬱」という題名がついている。もしかしたら私は鬱病患者かもしれない。だから希死念慮も当然ある。突然途絶えるかもしれない。それは嫌になるか死ぬかだ。私はこの手記がどれだけ続くか分からない。その程度に思っしてほしい。

—2—

だいたい自分は死ぬのに生命の起源などどうでもいいではないか。そんなに知りたいかい。それなら未来人が教えてくれるだろう。あなたの隣にいる。というのはSPOの見過ぎだが論理的に存在を科学的に解明することはできない。存在を産んだものは何か、それを産んだものは何かの無限連鎖に陥るからだ。私たちは訳の分からない世界を生きていると

言う以外ない。なぜ生まれたか分からずなぜ生きるのかも分からずなぜ死ぬのかも分からない不安定極まりない存在なのだ。全てが幻想と言ってもいいが物事はあまりにも明快にはつきりとある。ただ夢を見ている時は全く理性が働いていない世界を彷徨う。なぜ夢を見るかの効能は分かり始めたようだがなぜ見るかは分からない。もしかすると夢には驚くべき働きがあるのかもしれない。予知夢とか前世の夢とか不思議な報告はされている。だが私にはどうでもいいことだ。私はただの鬱病患者、この手記が少しでも長く続くこと以外何も考えていない。今、自分を生かすために食事をする。帰ってきてこの手記が続いているかどうか分からない。

食事をしてきた。3食お茶漬けである。お金がないからである。たまには魚や肉も食う。ちなみに私が小さい時は魚や肉が食べられなかった。可哀想であるからだ。飲み込もうとしても吐き出してしまった。それで随分虐められたが彼らはもう死んでいると思っている。悪いことをする奴は早死にしていると思っている。この手記は色々な角度に傾くことを知ってくれ。

かの有名なドストエフスキーの「地下室の手記」もかなりいいかげんに書いてある。どうでもいいようなことを脈絡もなく書いてある。この手記もその点は同じかもしれない。覚えているのはある紳士とすれ違う時にどちらが避けるかで必ずドスト氏が避けてしまうのを永遠と長々と書いている。どうでもいいことを長々と書くのはその後の小説群にあってても変わらない。老ぼれの酔っ払いのくだらぬ話を世の中のドストエフスキー愛好家は読まされてきたことか。そうかと思うとロシア正教の意味のわからぬ信教を読まされる。イワンという哲学にかぶれた次男の学生がこれまたこなれていない学説をわざと小難しく話す。それを世界中のドストエフスキー愛好家がこうでもないああでもないかと研究する。それより前の作品だが「罪と罰」のどこが名作なものか。ナポレオンにかぶれた青年が金貸しの婆あを殺して自分は正義の行為を行なったと思う。ところが殺人の罪を背負いきれなくなり、苦悩するという話だ。ラスコリーニコフという青年の一方的な思い上がりの殺人だ。殺人を苦悩するなら初めから殺さなければいい。途中色々あって最後にロシアの大地に口づけをするという話だ。登場人物は全てドストエフスキーの分身であるから執拗にクドクドと長々しく話が展開する。それが小説というものなのかもしれないがもっと簡潔にわかりやすく描写してほしい。ミステリーの要素を持ってきたから複雑な読みにくい作品になった。だが思い上がった青年が金貸しの婆あを殺すだけの話だ。それ以外は枝葉末

節に過ぎない。あれほどの大部の小説にしないで二十行ほどの詩で私はドスト氏の言いたいことを全て表現できる。地下室の手記の話から大分逸れてしまった。計算して書いていくわけではなく筆の赴くまま書いていくからこうなる。文章ももっと良くしようと思えば可能だ。だが私は死に損ないの鬱病患者だからこれでいいと思う。

さてドストエフスキーの「地下室の手記」の話だっけ。あれと同じくらい私の手記も支離滅裂である。生命の話をしようか。生命とは奇妙である。宇宙は偶然に生命を生んだのではなく必然的に生命を生んだのだ。宇宙にもしも目的があるとしたら生命を生むことだ。これは揺るがすことのできない事実である。生命を生むために宇宙という揺り籠があったと言ってもいい。その生命の目的とは何か。生命には目的はない。ただ在ればいいのだ。そうすれば自動的に人間は科学技術を使い、自らとその世界を改造していく。ただ言うっておきたいことは100万年経っても、生命は創造物以上にはなれないということだ。その頃の科学技術は想像できないが基本的に主体がいて客体がいる、つまり自分がいて他者がいるという関係は変わらないだろう。ただその関係は想像できなくらい密になっているだろう。ほぼ考えられる以上の発達を見せた科学は肉体を捨てて一個のコンピュータになっっているかもしれない。だが何億もの自我が死滅を恐れて組み込まれているかもしれない。だが彼らは何をしているのだろう。何もしない私のような存在はいらないらしい。考えられることといえば銀河帝国を作っているということだろう。急に目的になったが気にしないでほしい。だがその先は何があるんだろう。つまり存在とは存在し続けるのかということである。もはや戦いはないだろうから存在するかしないか、つまり生きるか死ぬかということである。鬱病患者の自殺率は高いが自らの電源を切るか、すなわち消滅する、自殺するかという問題である。100万年先はあまりに先すぎるので100年後にしよう。急激に桁が変わったが気にしないでほしい。100年後自殺は絶対にあるだろう。生物は狂ってくるかと自殺したがるのである。自分を消すという快楽は途絶えることがないだろう。私がこれを書くのはまだ生きて活動しているからである。あと何年かは生存するらしい。だが鬱病らしいから突然途絶えることもある。鬱病とはコロナウイルスのようにしつこく人間に付き纏い、人はどうしても死にたくなる生き物らしい。生きるのは苦であると言ったのは釈迦であるが人間はどんなに幸福の絶頂にいても死にたがる生き物らしい。これは昨今の芸能人の自死をみても明らかである。生きたい気持ちと死にたい気持ちは交互にまたは同時に起こる。どんなに笑顔で笑っていても腹の底ではいつ死のうか考えているので

ある。これは矛盾していないかと思うのだが人間とは矛盾の生き物であるらしい。そうである以上何が起こっても仕方がないのである。

私は今日6時間寝た。いろいろな夢を見て眠った気がしない。本人はただの夢とは思ってはいない。まともに相手をするから疲れて仕方がない。体の方も痛くてロキソニンを手放すことができない。生きているのが楽か死んでいるのが楽かと言われれば断然死んだ方なのだが、死ぬと楽になった主体が消えてしまうから楽も何もない。だから生きているうちは特に年取ったら楽に生きるべきである。

昨日は小難しいことを書いた。ドストエフスキーはもつと短ければいいが読むのにいらぬ部分が多いし分かりにくい。難しいことを分かりやすく書くのがこなれているというのである。おそらく本人も書いていて混乱していたのだろう。本人の手に負えないことを書くから難解になってしまうのである。世界中のドストエフスキー愛好者が難儀している。